

都市は劇場であり、劇場は都市である

劇場都市

vol.

18

2026

G

Takasaki Culture Event
Information Magazine
GEKIJOTOSHI

高崎市文化事業広報誌

公益財団法人
高崎財団
The Takasaki Foundation

劇場都市 2026 Vol.18

都市は劇場であり、劇場は都市である

都市は、人生の喜怒哀楽が繰り上げられる舞台であり、都市そのものが劇場である
そこで生まれる芸術文化は感動や創造性につながり、都市そのものを作っていく——
「劇場都市」は、そこで生み出される文化芸術活動とそのドラマを紹介していきます

Contents

2 公演情報

高崎芸術劇場

公演ラインアップ〈2026.11-2027.3〉

3 特集1

高崎市民とともに歩み続ける 音楽センター

開館65年の軌跡

Interview

高崎市民吹奏楽団 団長 宮澤 久実

日本舞踊家 西川 扇二郎

声楽家・合唱指揮者 赤羽 洋子

Special Interview

BUCK∞TICK Drums YAGAMI TOLL

9 特集2

ウィーンと高崎をつなぐ世界的ピアニスト
「菊池洋子×劇場」から広がる新たな音楽の世界

高崎芸術劇場アドバイザー・ピアニスト

菊池 洋子

裏表紙

Meet The GSO

群馬交響楽団 楽団員インタビュー vol.18

首席ファゴット奏者 塩塚 俊樹

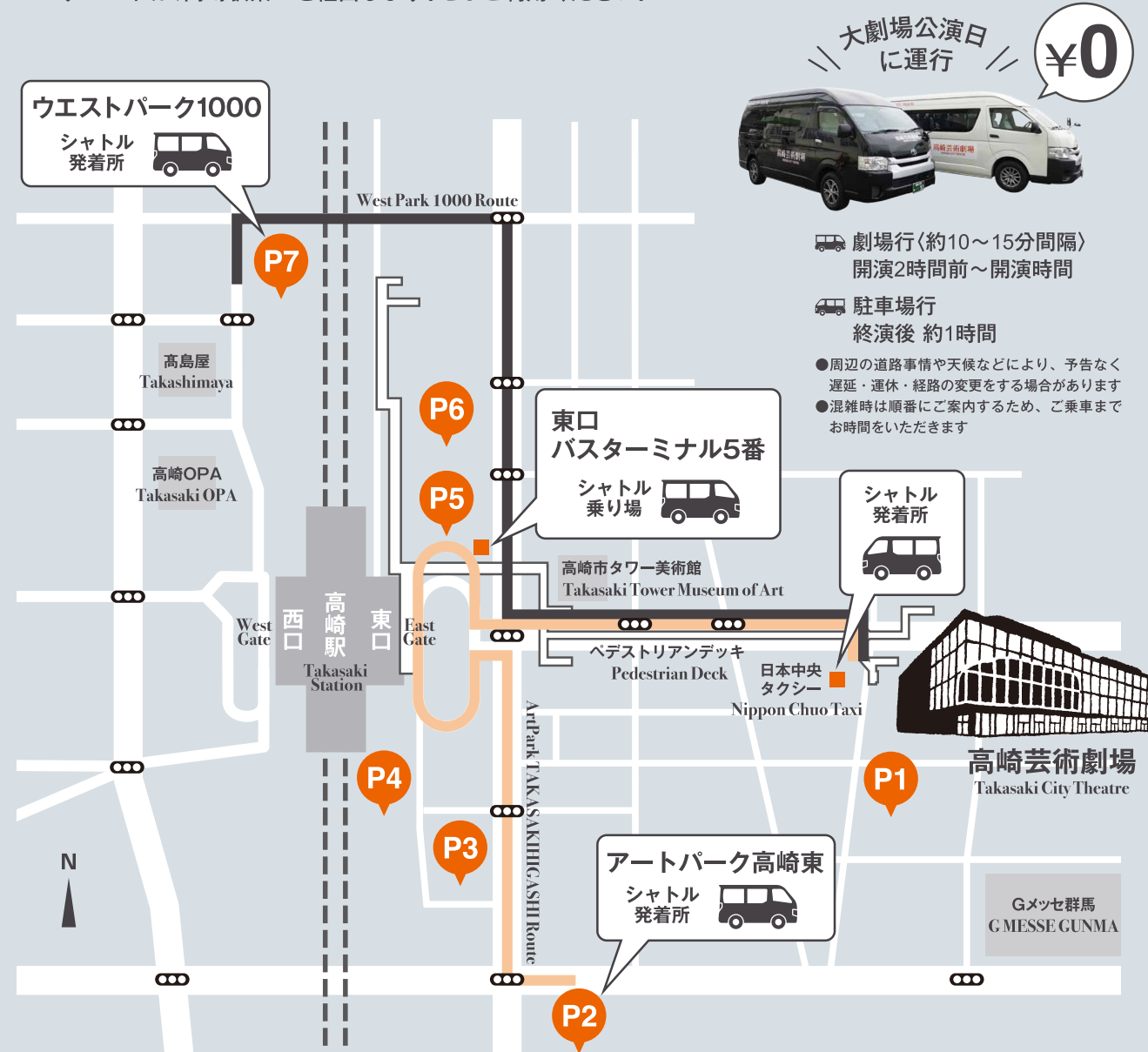
◀「スタジオシアター」ホワイエの壁面。杉板本実型枠という特別な枠材を用いて、無機質なコンクリートに温かみのある木目があしらわれている。硬質な重厚感にリズムを作り、豊かな空間を醸成。コンクリート打ち放しでありながら木目の残る、群馬音楽センター（1961年建立）の外壁を彷彿とさせる

INFORMATION

（高崎芸術劇場）

近隣駐車場＆シャトルのご案内

高崎芸術劇場へお車でご来館の際は、近隣駐車場をご利用ください。『大劇場』での公演日には、劇場とアートパーク高崎東、ウエストパーク1000をそれぞれ往復する「高崎芸術劇場シャトル」を運行しています。アートパークルートは、高崎駅東口を経由します。ぜひご利用ください。



- | | | | |
|---------------------------------|--------------|-----------------------|-----------|
| P1 芸術劇場南駐車場 | 高崎市北双葉町1-3 | P5 LABI1立体駐車場 | 高崎市栄町1-1 |
| P2 アートパーク高崎東 | 高崎市双葉町1-12 | P6 ココパルク800 | 高崎市東町5 |
| P3 メディアメガ高崎 | 高崎市下和田町5-3-8 | P7 ウエストパーク1000 | 高崎市旭町34-1 |
| P4 タイムズ高崎駅東口
自動車駐車整理場 | 高崎市八島町159 | | |

- 営業時間や料金など詳しくは、各駐車場にお問い合わせください
- 高崎芸術劇場に専用駐車場及び提携駐車場はありません

近隣駐車場・高崎芸術劇場シャトルについて、詳しくはWebサイトへ▶



高崎市民とともに歩み続ける 音楽センター

開館65年の軌跡

1961(昭和36)年に完成し
2026年に開館65年を迎えた
群馬音楽センター(以下、音楽センター)。
高崎市における文化の殿堂として
多くの人々に愛され続けてきた。
国内外のアーティストによる公演をはじめ
市民の文化活動の発表の場としても
活用されている。
今号では、音楽センターと
深い関わりを持ってきたみなさんの想いを
紹介する。

高崎市は、地域の幸福度を指標により比較した「幸福度ランキング」(日経研究グループ／株式会社日経研究出版)において、毎年上位に位置している。2022年版総合ランキングでは、中核市の中で全国3位、2024年版においても全国4位と、高順位を維持している。

特筆すべきは、文化分野で2位と、高い評価を得ていることだ。その背景には、高崎市で文化活動等を行う特定非営利活動法人の認証数が、1位を記録している実態がある。高崎市民の活発な文化活動が、暮らしやすさや生きがい、日々の豊かな充実感をもたらしていると言えるだろう。

こうした市民の歩みや日々の表現を、発表の場として長年にわたり支えてきた場所の1つが「群馬音楽センター」である。

音楽センターは、チェコ出身のアメリカ人建築家、アントニン・レーモンドが、高崎市の実業家・井上房一郎の依頼によって設計を手掛けた。鉄筋コンクリート折板構造により、内部は柱のない大空間が生み出され、舞台と客席が連続し一体感を生む。竣工時の1,960の客席数と1つの舞台は、開館した1961年という記念すべき年を刻んだ。

高崎芸術劇場

TAKASAKI CITY THEATRE

公演ラインアップ〈2026.11-2027.3〉

GRAND THEATRE 大劇場

11月 3日(火・祝)	ウィーン・フィルハーモニー ウィーク イン ジャパン 2026 大和証券グループ Presents リッカルド・ムーティ指揮 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団	2027年	1月1日(金・祝)	第37回高崎元旦コンサート 【出演】沼尻竜典(指揮)、菊池洋子(ピアノ) 群馬交響楽団
11月28日(土) 29日(日)	劇団四季ミュージカル「コーラスライン」	1月7日(木)	ニューイヤー・コンサート2027 ウィーン・フォルクスオーパー交響楽団	
12月19日(日)	群馬交響楽団×高崎芸術劇場 GTシンフォニック・コンサート vol.5 下野竜也の『惑星』レクチャー・コンサート 【出演】下野竜也(指揮・お話) 群馬交響楽団女声合唱団 ほか	2月7日(日)	群馬交響楽団×高崎芸術劇場 GTシンフォニック・コンサート vol.6 GTピアノ・コンチェルト・スペシャル 【出演】尾高忠明(指揮)、小曽根真(ピアノ)	
		3月2日(火)	大和証券グループ presents 辻井伸行 日本ツアー2027《展覧会の絵》	
		3月7日(日)	聖トマス教会合唱団& ゲヴァントハウス管弦楽団 J.S.バッハ「マタイ受難曲」(全曲)	

STUDIO THEATRE スタジオシアター

11月7日(土)	AZIZA featuring DAVE HOLLAND, CHRIS POTTER, LIONEL LOUEKE&ERIC HARLAND
12月 6日(日)	桂二葉 高崎落語会
12月19日(土)	民謡クルセイダーズ feat. 元ちとせ MINYO IS BACK IN TOWN 2026
2027年	
1月11日(日・祝)	José James presents Facing East: The Music of John Coltrane with special guest Ron Blake
2月 6日(土)	第28回高崎演能の会「弱法師」
2月13日(土)	小曽根真トリオ "TRiNFIniTY"
3月14日(日)	人形浄瑠璃 文楽「摂州合邦辻」「桂川連理柵」

CONCERT HALL 音楽ホール

11月 7日(土)	ファビオ・ピオンディ &エウローパ・ガランテ「四季」
11月18日(水)	桑原志織 ピアノ・リサイタル
12月 5日(土)	エマニュエル・パユ 無伴奏フルート・リサイタル
12月 6日(日)	バッハ・コレギウム・ジャパン クリスマス・カンタータ
2027年	
1月23日(土)	ジャン＝ギアン・ケラス J.S.バッハ「無伴奏チェロ組曲」全曲演奏会
2月 4日(木)	マチュー・デュフォー フルート・リサイタル

※公演内容について、追加変更等がある場合がございます。予めご了承ください

チケットご購入

※未就学児の入場はご遠慮ください(劇団四季は除く) ※車椅子席・介助席のご購入は、高崎芸術劇場チケットセンターまで電話でお申し込みください
※チケット発売日や料金など最新の詳細情報は、当劇場Webサイトなどでお知らせします ※10人以上の団体でご鑑賞の場合は、発売前にお席を確保いたします(一部公演を除く)

Web

高崎芸術劇場メンバーズ

高崎芸術劇場メンバーズ

登録無料・24時間受付

電話

高崎芸術劇場チケットセンター

027-321-3900

10:00～18:00(無休)

窓口

高崎芸術劇場2Fチケットカウンター

10:00～18:00(無休)

ほか高崎市内9か所の高崎市施設プレイガイド

音楽センターヒストリー

群響の活動により高まった、
音楽センター建設の機運

音楽センターの建設と関係が深いのは、群馬交響楽団である。群響が設立されたのは、終戦間もない1945年。子どもたちに生の音楽を届けようと、1947年から「移動音楽教室」を開始。県内各地の学校や社会福祉施設を巡回するという、全国でも例のない活動が評判を呼んだ。

群響の奮闘を描いた映画「ここに泉あり」をきっかけに全国にその名が広まると、活動拠点をつくろうと、市民の中に「音楽センター建設運動」が広がった。さらに文部省により全国初の「音楽モデル県」に群馬県が指定され、建設運動は大きく動いた。



群馬交響楽団の前身「高崎市民オーケストラ」(1946年)
「ときの高崎市民之を建つ 群馬音楽センター40年のあゆみ」(2001年／高崎市)より



発足当時の様子

行き場をなくした。それを機に、打楽器奏者をはじめ練習に参加する楽団員の数が増え続けた。その頃には市内外にアマチュア吹奏楽団が多数誕生しており、他団体に所属していく団員の姿もあった。「楽器庫が音楽センターにあり、サポートされていたことがやはり大きかった。打楽器のない合奏はつまらないですよ」と宮澤さんは言う。

1990年、練習に来る団員が、ついに4人になった。「私が団長になった数年後のことです。どんどん、どんどん、負のスパイラルに陥りました」と苦悩を思い出す。

「もうやめようか」。設立当初から在籍する団員と話した。しかし、「自身

が団長のときに、高崎市民吹奏楽団がなくなるのは嫌だ」という強い気持ちで、宮澤さんは奮い立たせた。

宮澤さんは在籍する団員たちに電話を掛け「もう一度、始めよう」と誘った。その熱意が通じ、何とかメンバーが集まり、公園の屋外ステージに、25人の吹奏楽団として出演することができた。演奏は納得いくものではなかった。「ただ、大変なことだったのに『楽しかったね』って言うって」と当時を振り返る。この日の演奏をきっかけに、楽団は息を吹き返す。

1992年には音楽センターの南側にシンフォニーホールが建設され、練習会場として使用できるようになると、団員たちの音楽への情熱が再び湧き上がった。少しずつ団員が増え、楽団は完全復活を遂げた。

その後は、演奏技能の強化にも取り組んだ。群響クラリネット奏者を正指揮者に迎えたほか、東京都交響楽団チューバ奏者にも指導を仰ぎ、音楽性をより一層深めていく。

現在は、春のコンサートや冬の定期演奏会を音楽センターで開催。吹奏楽曲やクラシック、ジャズ、人気のJ-POP、さらには委嘱初演曲にも挑んでいる。時には多彩なゲストを迎えるなど、音楽活動を展開している。

楽団は、来年3月に創団55年を迎える。団員一人一人が情熱を持ち、聴衆と共に楽しめる演奏を目指しながら、今日も歩みを進めている。

**高崎市民吹奏楽団
第54回定期演奏会**
【日時】2026年12月5日(土)
18:00開演(17:15開場)
【出演】千葉理(指揮)、
高崎市民吹奏楽団
【曲目】J.テ・メイ／「指輪物語」
より、酒井格／森の贈り物、樽屋雅徳／斐伊川に流るるクシナダ姫の涙
ほか
【料金】全席自由 500円

「私たち市民吹奏楽団のホームグラウンドはこの音楽センターです。活動ができたことは、高崎市民の名をいただいて私たちとして喜びでもあります。事務方の職員や舞台技術、照明、音響スタッフの皆さんには本当に良くしていただいている。演奏会プログラムにも、必ず感謝の言葉を添えています」と宮澤さんは言う。

音楽センターは市民文化活動の受け皿として、これからもあり続ける。

幼い頃、初めて訪れた音楽センターに、宮澤さんは強い衝撃を受けた。「アントニン・レーモンドのデザインは、外観が美しく奇抜。『なんだろう、この存在感は』と思いました。群馬音楽センターという名前も良い」と笑顔を見せる。「音楽センターのステージから見ると照明デザインがあまりにも美しい。客席にいるお客様の表情が見えます」と印象を語る。

「私たち市民吹奏楽団のホームグラウンドはこの音楽センターです。活動ができたことは、高崎市民の名をいただいて私たちとして喜びでもあります。事務方の職員や舞台技術、照明、音響スタッフの皆さんには本当に良くしていただいている。演奏会プログラムにも、必ず感謝の言葉を添えています」と宮澤さんは言う。

市民活動を支える
音楽センター

音楽センターは、
私たちのホームグラウンド

高崎市民吹奏楽団 団長 宮澤 久実

音楽センターの
全面協力で発足

音楽センターの歴史を語るうえで、欠かせない存在の1つが、1972年に発足した「高崎市民吹奏楽団」。

発足以来、音楽センターを活動の本拠地として、高崎を中心に50年以上にわたり音楽活動を続けてきた歴史あるアマチュア吹奏楽団である。36人で活動を始めた同楽団は、現在、約90人が在籍する。学生や会社員、主婦など10代から70代まで、世代も職業も異なるメンバーが、楽器への情熱を持ち、集まっている。その一人、団長の宮澤久

楽団解散の危機から
復活まで

宮澤さんは、1982年に大学卒業

実さんは、クラリネットと指揮者の役を担っている。

楽団が発足した経緯について、宮澤さんは「中学校や高校などスクールバンドで演奏技術を磨いた社会人に、音楽に対する情熱を継続できる場を」と音楽関係者が立ち上がったのがきっかけでしょう」と話す。発起人には、楽団の初代団長や音楽指導者のほか、当時の音楽センター事務局職員も名を連ね、楽団の事務局は音楽センター内に置かれた。

楽団創立時から所属し、楽員会会長を務めた齊藤英司さんは、「社会人がそれぞれ仕事をやりくりし、決められた時間に集まり練習するのはとても大変です。さらに練習場所の確保や運営費の問題など、悪戦苦闘しながらのスタートでした」と当時を語る。宮澤さんは「そうだった中で、音楽センターが全面協力してくれたと聞いています」と話す。音楽センターの会議室を毎週の練習場所として利用でき、さらに建物裏側に建てられたプレハブ小屋を、打楽器の置き場として得られたことが、楽団にとって大きな助けとなった。そうして動き出した市民吹奏楽団の音楽活動の裏には、いつも音楽センターの支えがあった。

後、故郷高崎に戻り、教職に就くと同時に高崎市民吹奏楽団へ入団。5年後の1987年に団長となる。仕事が終わると、音楽センターに通い「クラリネットを吹くことで、リフレッシュしていた」と当時を振り返る。

音楽センターでは時を同じくして大改修工事が始まった。工事に伴い、楽団で楽器庫として使用していたプレハブ小屋は取り壊され、大きな打楽器は



高崎市民吹奏楽団 第53回定期演奏会(2025年)

音楽センターヒストリー

昭和36年、
高崎市民の熱い想いが生んだ
音楽センター

市の予算が約8億円の時代に、総工費3億3,500万円という巨費が投じられ音楽センターは建設された。当時は一般にクラシック音楽への理解がそれほど深くなく、ホール建設の必要性を説くのは困難だった。しかし募金運動により、市内の全町内から約3,500万円にも上る寄付が集まり、建設費に充てられた。音楽センターの前庭には「昭和三十六年 ときの高崎市民之を建つ」と刻まれた記念碑が建てられ、当時の人々の熱情と期待や希望、そして誇り——さまざまな思いを今に伝えている。



設置を呼びかける横断幕
「ときの高崎市民之を建つ 群馬音楽センター40年のあゆみ」(2001年／高崎市)より



高崎第九合唱団第30回演奏会(2003年)

「高崎に音楽を聴ける場所があることは、まちの発展につながり、市民の暮らしを豊かにしてきました」と赤羽さん。また、音楽センターは「プロの芸術鑑賞だけではなく、市民活動の発表の場」とも語る。市民の歩みを見守り続けてきた音楽センターに、活動の軌跡が浮かび上がる。「ときの高崎市民之を建つ」という建設当時の思いを受け、次の代に引き継いでいくのが私たちの務めです」と力を込めた。

音楽センターに、
市民活動の軌跡あり

声楽家
合唱指揮者 **赤羽 洋子**

高崎第九合唱団の団長として活躍し、高崎市の音楽振興をけん引してきた赤羽洋子さん。「私の歴史は、全部音楽センターとシンクロしています」と人生の歩みを音楽センターに重ね合わせる。



群馬県立高崎女子高等学校卒業、武蔵野音楽大学卒業。ソプラノ歌手として各種公演に出演。1982年より高崎第九合唱団の指導者・指揮者を務め、海外公演など国際交流に尽力。高崎市文化賞、群馬県文化賞受賞。

音楽センターの中に
私の心がある

赤羽さんは、高崎市あら町で楽器やレコードを扱う「赤羽楽器」の家に生まれ、幼少期から音楽に親しんだ。ピアノと声楽のレッスンに通い、次第に音楽の道を志すようになった。

音楽センターのこけら落としの舞台に立ったときから、その歴史は始まる。当時高崎女子高等学校音楽部に所属していた赤羽さんは、音楽センターの舞台に立ち、高崎市歌を合唱した。音楽大学卒業後に出演した郷土新人紹介演奏会は、今も鮮烈に記憶に残る。目の前に広がる客席に圧倒され、ホールの大空間に包み込まれるような感覚の中、両親へ感謝を込めて歌った。結婚後は、幼い子どもを連れ、幾度となく通った。「息子にとっては母に音楽会に連れられ、食堂でナポリタン



西川扇生三回忌追善日本舞踊会(2021年)常磐津「京人形」 扇二郎さん(左)、弟子の西川扇佳蝶さん

音楽センターは
「育ててもらった場所」

日本舞踊家 **西川 扇二郎**

重要無形文化財「日本舞踊」総合認定保持者である日本舞踊家・西川扇二郎さん。音楽センターは、その至芸を披露し、多くの舞台を創ってきたかけがえのない場所になっている。



西川流十世宗家西川扇藏の内弟子に入り、1968年に師範代となる。高崎市文化賞、群馬県文化奨励賞、群馬県総合表彰、群馬県功労者表彰受賞。重要無形文化財「日本舞踊」総合認定保持者。文化振興扇生CLUB代表。

師が愛した音楽センター

扇二郎さんは1947年、栃木県宇都宮市に生まれた。日本舞踊との出会いは小学生の頃。親戚の結婚式で、民謡「黒田節」を踊ったことが契機となり、その素質を見出され上京。15歳で西川流宗家のもとへ、住み込みの内弟子として入った。その後、名取、師範代となり出会ったのが、高崎市新町出身の日本舞踊家・西川扇生さんである。扇二郎さんは扇生さんの養子となり、30歳の頃、活動の拠点を高崎へ移す。扇生さんは、舞踊公演を主催するほか、高崎市の事業にも積極的に協力。子ども向け教室で指導にあたるなど、高崎の文化振興に尽力していた。過去の取材で、扇生さんはこう答えている。「音楽センターは若き舞踊家にとって、発表力のつく会場。自身も踊るたびに素晴らしい会場だと実感する」。扇二郎さんは、「扇生先生は音楽センターが大好きだった。ずっと「ここが自分の場所だ」という思いがあった」と語る。

音楽センターが叶えた
チャリティー公演

二人は舞踊公演を主催する傍ら、ボランティア活動にも積極的に参加。法務大臣より感謝状を贈呈された「愛の虹チャリティー公演」をはじめとするボランティアチャリティー公演も、音

高崎で日本舞踊を
次の世代に

2023年、日本舞踊が重要無形文化財に認定され、その芸術性や歴史的価値が認められた。さらに扇二郎さん

音楽センターで開催。「音楽センターだからできた公演だった」と扇二郎さんは当時を振り返る。音楽センターは、約2千席という規模を備えるだけではなく、舞台や楽屋などすべてが同じ階に配置されていることで、出演者をはじめ、すべてのスタッフの動線が確保されるという。「こんなに使いやすいところはないよね。だからみんなついつい頑張っちゃう。音楽センターだ」と。

主催する公演では、音楽センターのせり上がり舞台も活用。さらに舞台下手に花道を設け、「つらあかり」という照明を設置し、踊り手を際立たせる。こうした設備は日本舞踊で必ずしも必要なものではないが、「お客さんが楽しめるように」と舞台を創り上げる。

音楽センターに能舞台を設え
“当代一流”を招き能・狂言公演を続ける「たかさき能」

「たかさき能」は、日本の伝統文化である能や狂言を高崎市民に身近に感じてもらうことを目的に、1986年から始まった。観音山や市庁舎前広場を会場に、かがり火の元演じられる「新能」を行ってきた。第21回からは音楽センターに舞台を移す。2007年にたかさき能(新能)実行委員会が発足。以来、能は観世流、狂言は大蔵流・山本家を中心に、人間国宝など“当代一流”を招いている。

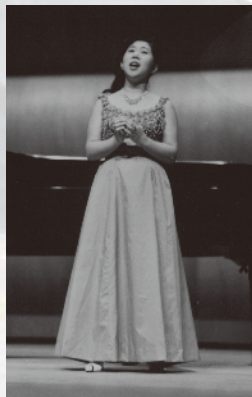
実行委員長竹中隆さんは「都内の能公演にも行きますが、たかさき能が一番、客席の集中力が高い。演者の方々からも『お客様が

素晴らしい』と言われます。『日常の中に当たり前にある。でも、行くときは晴れの気持ちで、少し緊張感を持って』。音楽センターへのそんな心持が、高崎市民に根付いているからでは」と話す。「超一流の技にふれることができる生の機会が、音楽センターにあります。ぜひ一度、能や狂言の世界に浸ってみませんか」と呼びかける。

【公演情報】
第40回 たかさき能

2026年11月21日(土)
14:00開演(13:00開場)

公演情報など詳しくはこちら▶



郷土新人紹介演奏会(1965年)

ステージで歌った「第九」——人生の節目を振り返れば、いつも音楽センターが共にあった。

市民とともに歩んだ軌跡
そして未来へ



ウィーンと高崎をつなぐ世界的ピアニスト
「菊池洋子×劇場」から広がる新たな音楽の世界

高崎芸術劇場アドバイザー・ピアニスト

菊池洋子

音楽の都・ウィーンを拠点に世界で活躍する、群馬県出身のピアニスト・菊池洋子さん。彼女の音楽は、曲と真摯に向き合い続ける姿勢や、幾多の出会いにより積み重ねた経験から紡がれています。2026年4月から、高崎芸術劇場のアドバイザーに就任。ピアノ6台の弾き比べや「ゴルトベルク変奏曲」のリサイタルに先がけたレクチャーなど、新たな試みを展開し、劇場の可能性を広げています。今号では、ピアニストとしてのこれまでの歩みを振り返るとともに、劇場から届けたい新たな音楽の世界についてお話を伺いました。



BUCK∞TICK Drums

YAGAMI TOLL

Special Interview

日本のロックシーンに多大な影響を与えたレジェンドバンド「BUCK∞TICK」。1998年の「SEVENTH HEAVEN TOUR」公演以来、音楽センターで公演を重ねています。そのメンバーで、高崎市出身のドラマー、ヤガミ・トールさんに、音楽センターでの思い出を伺いました。

ヤガミ・トール/YAGAMI TOLL

1987年にメジャーデビュー以来、日本のロックシーンの第一線で活躍し続けるBUCK∞TICKのドラマー。不動であり孤高であるその姿は、後続するアーティスト達にも多大な影響を及ぼしてきた。1989年にリリースされた3rdアルバム『TABOO』でチャート第一位を獲得。デビュー後わずか2年の間に日本武道館、東京ドームと席巻し、一躍トップアーティストに。常にその時代の先鋭的な要素を取り入れ、まさにBUCK∞TICKでしか成し得ない独自の音楽性を提示しながらも、今なお進化し続けている。

思い出の地・高崎の原点 音楽センター

23歳まで高崎で過ごしていたので、小学校の合唱コンクールも、成人式もこちらでした。アマチュア時代には、会議室でファッションショーとライブに出演したこともあります。

25歳でメジャーデビュー後、初めて音楽センターのステージに立ったのが1988年でした。翌年活動休止して、再始動となる東京ドーム公演の前にライブをやりたいと会場を探していたときにも、音楽センターだけが貸してくれました。ありがたかったですね。

面白かったのが、90年の「悪の華」公演のとき。50公演以上行った全国ツアーの最終日が音楽センターでした。そのときの舞台セットが、中世の柱みたいなものだったんです。そしたら、入らなかった。柱が長くて。音楽センターの舞台は天井の高さがいないんですよね。それで舞台監督さんが、「今日最後だからいいや、このサイズに合わせて切っちゃえ」と。柱を切って、入れたこともありました。

それと、唯一親父がライブを観に来たのも音楽センターでの公演でした。音楽活動についてもそれまで全然認めて

くれなかったんだけど。メジャーデビューして音楽センターでやるようになった頃から認めてくれましたね。

他の会場と絶対的に違うのは、お客さんの歓声です。上から「わーっ」と来る。その聞こえ方が、違うんです。歓声が降ってくるようなんですよ。お客さんと一体化している感じがあります。どんなところでもベストを尽くして演奏していますが、ここでの公演は「自然に乗ってる」と感じます。これからも思い出のある高崎の音楽センターでライブを重ねていきたいですね。



BUCK∞TICK TOUR 2025 スプロサ SUBROSA 公演(2025年6月7日)

INFORMATION

日本の近代建築に大きな足跡を残したチェコ出身のアメリカ人建築家、アントニン・レーモンドが設計を手がけた音楽センター。レーモンドの代表作で、近代建築の傑作の一つとされ、DOCOMOMO近代建築20選や公共建築百選にも選ばれるなど、高い評価を得ています。

音楽センターでは、普段は見ることができない舞台裏を特別に公開する見学会・バックステージツアーのほか、建物の歴史を紹介しながら館内を案内する建築案内を定期的に開催しています。



開催情報、その他群馬音楽センターのイベントなどについて、詳しくはWebサイトを確認ください



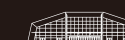
バックステージツアー

照明や音響の操作など、舞台演出を支える技術についてもご紹介。舞台から見る客席の景色や、せり上がりの体験など、ホールを新たな角度から楽しめる内容です。



建築案内

職員の案内で館内の要所を巡ります。音楽センターの歴史や設計の特徴をはじめ、ホール内の形状や材質に至るまで、解説を交えながら建築の魅力をご紹介します。



ピアノリストへの道を照らした 恩師・田中希代子氏との出会い

私がピアノを始めたのは4歳の頃。幼稚園の先生がピアノを演奏する姿を見て「私も弾いてみたい」と思ったことがきっかけでした。両親に連れて行ってもらったコンサートで、素敵なドレスを着たピアノリストが多くのお客様から拍手をもらう様子を見て、幼心に「ピアノを頑張ろう」と決心したんです。

ただ、心から「音楽の道を進もう」と思ったのは、世界的なピアニスト・田中希代子先生との出会いがあったからです。中学時代は地元・群馬の先生にピアノを習っていました。ハイドンのソナタを勉強した際に、先生の勧めで初めて希代子先生のCDを聴いたとき、雷に打たれたような衝撃を受けました。美しいだけでなく、人の心をぐっとつかんで離さない演奏が、今までのピアノのイメージを大きく変えるものでした。私はどうしても希代子先生のレッスンを受けて、地元の先生のとてをたどり、演奏を聴いてもらう機会をいただきました。熱意が通じ、レッスンを受けられることに。2週間に1回、実家から片道2時間かけて東京へ通いました。さらに、高校は、希代子先生が教鞭を執られていた桐朋女子高等学校へ進学。毎週レッスンを受ける日々が始まりました。中学時代は母がレッスンに付き添ってくれ



ましたが、先生は必ず母へ感想を聞きました。母は「きれいな曲でした」などと話すのですが、先生はそのような音楽を知らない人の感想が大事だと仰いました。音楽には「伝わる演奏」と「伝わらない演奏」の2種類はなく、初めて聴く人や音楽に詳しくない人でも「いい曲だった、想いが伝わった」と感じる演奏をすること——先生の教えてくださった音楽でした。

だからこそ、私は常に「聴衆の皆さんへ伝えること」を第一に考えて演奏しています。先生の言葉を借りれば「強気な音楽」で、自分の表現したい色を強く持ち、自信を持って表現することを心がけています。先生が亡くなるまでの6年間のレッスンは忘れがたいものです。学んだことをまとめたノートは宝物で、今でも見返しては力

をもらっています。

憧れへまっしぐら 名門・イモラ音楽院へ留学

高校卒業後はイタリアへ留学。好きな演奏家のプロフィールで名前を見ることが多かったイモラ音楽院に行きたくて、音楽院と関わりの深いヤマハへ「留学したいんですけど、どうしたらいいですか？」と電話したことを覚えています。今も昔も「やりたい！」と思うとまっしぐらに突き進んでしまう性格なんですよ（笑）。

幸いにも、この電話をきっかけにイモラ音楽院の創立者であり学長のフランコ・スカラ先生に私の演奏を聴いていただく機会を得、入学することが叶いました。高校卒業直後ということもあってたくさんの方が氣にかけてくれたため、数か月で言語を習得でき、留学生活は楽しいものになりました。スカラ先生はいつも「洋子はどういう風にこの曲を弾きたいの？」と聞いてくれます。「こう弾くべきだ」と言われることは一度もなく、私の表現したいことに合わせて、体の使い方をアドバイスしてくれるんです。だからこそ、イモラ音楽院出身の演奏家は、体の使い方は似ていても、演奏は十人十色。生徒の持ち味を生かすスカラ先生の指導の賜物です。そんな教育が肌に合い、13年間のびのびと学ぶことができました。

フォルテピアノで研鑽を積み モーツァルトを極めた3年間

「フォルテピアノ」もイモラ音楽院で学んだことのひとつです。18世紀から19世紀前半のモーツァルトやベートーヴェンが活躍した時代に作られた、ピアノの元となる楽器です。スカラ先生は100台以上収集していて、日々いろいろな楽器を楽しんでいる音が聞こえていました。私も弾いてみたいと思い、先生の「作曲家を絞って学ぶといい」とのアドバイスのもと、モーツァルトの曲を勉強することに。フォルテピアノは、現代ピアノと比べて鍵盤が軽く、繊細な指のコントロールが求められます。音量や強弱の幅も大きくはないのですが、音色やアーティキュレーションの変化を繊細に表現できるのが特徴です。モーツァルトの曲は「会話の音楽」と言われますが、フォルテピアノを弾くと、一つ一つの音を言葉のようにはっきりと際立たせ、フレージングを意識して演奏する必要がありますが体感できます。作曲された当時の楽器で練習する中での学びは多く、現代ピアノの演奏のときにも良い変化がありました。

3年後の2002年、勉強の成果を確認する意味で第8回モーツァルト国際コンクールに臨みました。今、振り返ってみると「フォルテピアノの学びをピアノにどう生かすか」だけを考えて演奏したからこそ、音楽に集中で

きたのだと思います。結果として、優勝という成果を残すことができました。

作曲家が実際にその時代に使っていた楽器を体験して学んだ機会は、他にもありました。二段鍵盤チェンバロの曲であるJ・S・バッハの「ゴルトベルク変奏曲」に本格的に取り組んでいた時期に、チェンバロ奏者、曽根麻矢子さんのレッスンに2年間通い、演奏方法を学びました。チェンバロは弦を弾いて音を出すため、フォルテピアノ以上に鍵盤が軽く、強弱が付けられません。曽根さんは「メロディーを際立たせるのではなく、ハーモニーを奏でる」ことを教えてくださいました。弾いた音を自分で聴く、聴き終わったら次の音を出す、そのようにすると自然とその音がお客様に聞こえる——チェンバロの演奏経験もまた、私にとって大きな糧となりました。

ベルリンの 忘れられない演奏会と 大好きなバレエの思い出

イモラ音楽院を卒業した後は、好きなピアニスト、ダニエル・バレンボイム氏がよくコンサートを行っていたベルリンへ移住。さまざまな演奏会に足を運びました。最も印象に残っているのは、彼が音楽総監督を務めるベルリン国立歌劇場管弦楽団の演奏会です。前半にモーツァルトのコンサートが演奏されました。何度も聴いてき

た曲のはずなのに、彼の弾き振りは「まさに、今作ったばかりの曲を演奏している」と錯覚するような素晴らしい。圧倒されて涙が止まりませんでした。あまりにも満ち足りた気持ちになり、後半のプログラムを聴かずし雪の中を1時間歩いて帰ったことも鮮明に覚えています。一生忘れられない、心に残るコンサートでした。

不思議なご縁で導かれた 音楽の都・ウィーン

音楽の都・ウィーンを初めて訪れたのは、ウィーン国立歌劇場で開催された世界的なバレリーナであるスヴェトラナ・ザハロワ氏の舞台を観に行った時でした。観劇後、馬車が走る夜の小道を散歩し、タイムスリップしたかのような美しい街並みに感動したことを覚えています。かつての音楽家たちも見ただであろう風景を氣に入っで、移住を決意。コロナ禍に大家さんの事情で家を手放すまでの1年半、ウィーンでの暮らしを楽しみました。その後、一度日本へ帰国し、再びウィーンに戻ったのは4年後のことです。「もうここに住むことはないだろ

う」と思っていました。再会した知人にウィーン国立音楽大学ピアノ科の主任アシスタントプロフェッサーの仕事を紹介していただき、再び拠点をウィーンに移すことになりました。

2年ほど教鞭を執りながらの演奏活動を続けていましたが、東京での「世界バレエフェスティバル」に出演したことが次の転機に。共演したウィーン国立バレエ団芸術監督のアレッサンドロ・フェリ氏から、ピアノ協奏曲が使われるバレエ公演でソリストをしてほしいと誘われたのです。一度はバレエ公演の舞台を経験してみたかったので、すぐうれしかったですね。

ウィーンの生活では、もう一つ、不思議なご縁を感じる出来事がありました。ウィーンで新しい家を探す中で、亡き希代子先生が帰国前に住んでいた部屋を見つけたのです。大家さんが先生のピアノをそのまま保管されていて、部屋と共にピアノを貸していただけになりました。家探しに苦労する私を、希代子先生が助けてくれたのでしょね。先生が弾いていたピアノで練習できることは奇跡のようで、本当に幸せです。

高崎芸術劇場アドバイザーに 弾き比べの企画に出演

今年から、地元・群馬が誇る素晴らしい劇場、高崎芸術劇場のアドバイザーを務めさせていただいています。



オープンシアターvol.25は、幼少期やイモラ音楽院時代にヤマハに親しみ、スタインウェイ・アーティストでありながら、ウィーンでベーゼンドルファーを弾く菊池さんだからこそ実現した



「ゴルトベルク変奏曲」全曲を、休憩なしで約80分にわたり弾き切った菊池さん。息をのむように演奏を見つめて聴き入っていた客席からは、割れんばかりの拍手が贈られた

今後、アドバイザーとしては「お客様の世界が広がるような企画」をさらに実現したいと考えています。私といえはモーツァルトの楽曲をイメージされる方も多いので、いずれはモーツァルトの企画にも取り組んでみたいですね。大好きなバレエとの共演も、高崎の皆様の前で披露できればうれしいです。

また、来年はかねてより出演したかった夢の舞台である「高崎元旦コンサート」に出演させていただきます。演奏曲は、ウィーン国立バレエ団の公

が、これほどのピアノがそろっているホールは世界的にも聞いたことがありません。実際、全国からピアノ好きなお客様が集まり、楽器メーカーの方もチケットの抽選に応募されたそうです。各ピアノのレクチャーや聴き比べが楽しめる貴重な機会は、多くの皆様からご好評をいただきました。

私自身、3機種とはそれぞれ長い付き合いがあります。子どもの頃からイモラ音楽院時代はずっとヤマハを弾いていましたし、スタインウェイ・アイティストとして2台のピアノを所有して練習してきました。また、ウィーンではほとんどのピアノがベーゼンドルファーでしたので、公演や練習でもたくさん弾く機会がありました。

そうした経験のおかげで、今ではメーカーごとのピアノの特徴をつかみ、曲に合わせて機種を選べるように

10月の「高崎音楽祭」に出演 ウィーン・フィル来演にも期待

今日の衣装は「ゴルトベルク変奏曲」を演奏するときに着るドレスです。イタリアのファルコネーリというブランドで、曲に集中できるシンプルな色とスタイルが気に入っています。

高崎芸術劇場の音楽ホールはどの席からステージがよく見えるので、衣装選びも大切にしています。



レクチャーでは、終演後のサイン会で菊池さんに直接質問したり、意見を交わしながら会場を後にするお客さまの姿も。作曲家や演奏者への興味を育む機会となり、次回を望む声も多く聞かれた

「菊池洋子が語る『ゴルトベルク変奏曲』」は、私が毎年ライフワークとして取り組んでいる「ゴルトベルク変奏曲」のリサイタルを当劇場で初開催するにあたり、レクチャーの機会として企画したものです。静かなアリアから30の変奏を経て再びアリアへ戻る、1時間20分のこの曲は、初めて聴くと長く難しい曲だと感じる方がほとんどでしょう。私は、イタリア留学中にアンドラーシュ・シフ氏の演奏を聴きました。途方もない大曲が一瞬に感じられるような体験でした。その感激を彼に伝えようと、若い頃から毎年この曲に取り組んでいると教えていただきました。毎年コツコツ弾いてようやくたどり着けるような演奏もあるのだと思います、私も20代からこの曲の勉強を始めました。ただ、長い人生を旅するような壮大な曲だからこそ、演奏に必要な体力・精神力・集中力が桁違いです。

「ゴルトベルク変奏曲」
初のレクチャー企画に手応え

「ゴルトベルク変奏曲」は、私が毎年ライフワークとして取り組んでいる「ゴルトベルク変奏曲」のリサイタルを当劇場で初開催するにあたり、レクチャーの機会として企画したものです。静かなアリアから30の変奏を経て再びアリアへ戻る、1時間20分のこの曲は、初めて聴くと長く難しい曲だと感じる方がほとんどでしょう。私は、イタリア留学中にアンドラーシュ・シフ氏の演奏を聴きました。途方もない大曲が一瞬に感じられるような体験でした。その感激を彼に伝えようと、若い頃から毎年この曲に取り組んでいると教えていただきました。毎年コツコツ弾いてようやくたどり着けるような演奏もあるのだと思います、私も20代からこの曲の勉強を始めました。ただ、長い人生を旅するような壮大な曲だからこそ、演奏に必要な体力・精神力・集中力が桁違いです。

なりました。昨年の高崎音楽祭でも、コンサート曲目に合わせて前半と後半でピアノの機種を入れ替えるご提案をさせていただきました。定員400人のホールでは例のない試みでしたが、チケットが即完売するほど反響は大きかったです。今後もピアノごとの音色をお楽しみいただけるような企画を作っていきたいです。

公演情報

第37回高崎音楽祭
ヨハネス・モーツァー&菊池洋子
デュオ・リサイタル

【日時】2026年10月11日(日)14:00開演(13:30開場)
【会場】高崎芸術劇場 音楽ホール
【出演】ヨハネス・モーツァー(チェロ)、菊池洋子(ピアノ)
【料金】全席指定 6,000円
【問い合わせ】高崎音楽祭事務局
☎027-322-9195

ヨハネス・モーツァー

詳細は
Webサイトへ▶

第37回高崎元旦コンサート

【日時】2027年1月1日(金・祝)13:30開演(12:30開場)
【会場】高崎芸術劇場 大劇場
【出演】沼尻竜典(指揮)、菊池洋子(ピアノ)*、群馬交響楽団
【曲目】レスピーギ／交響詩《ローマの松》、木村秀彬／「豊臣兄弟!」(大河ドラマテーマ曲)、ラフマニノフ／パガニーニの主題による狂詩曲 Op.43* ほか
【料金】全席指定 S席 5,000円 A席 4,000円 B席 3,000円(U-25 1,500円)
【チケット】Web先行:10/2(金)10:00
電話発売:10/6(火)10:00
窓口発売:10/7(水)10:00
【問い合わせ】高崎芸術劇場チケットセンター
☎027-321-3900

沼尻竜典

詳細は
Webサイトへ▶

演でも演奏したラフマニノフの「パガニーニの主題による狂詩曲」です。昨シーズンの公演では、ダンサーからさまざまなリクエストをいただき、バレエのテンポだからこそ聴こえるメロディーや音色、新たな曲の解釈に気づくことができました。加えて、バレエ団公演でウィーン国立歌劇場管弦楽団と演奏した影響か、お客様から「音が太くなったね」と言われます(笑)。演奏環境や共演者の音が、少しずつ自分の中に染みこんで、演奏が変化していると思うとうれしいですね。新年にふさわしい華やかな名曲を、バレエ、そ

して、ウィーン国立歌劇場管弦楽団と共演した「今の私」だからこそできる演奏でお届けします。これまでとは趣向が違う新たなコンサートになる予定ですので、ぜひご来場いただければと思います。

高崎芸術劇場は、皆さまにとって気軽に集えるミートینگポイントのような場所になっていると思います。私自身、劇場に来るたびに「いいな」と思う、そんなこの場所により多くの方に足を運んでもらえるよう、これからも皆さまに楽しんでいただける企画を考えていきます。ぜひご期待ください。

曲と本格的に向き合えたのは、コロナ禍の時期でした。コンサートが開催できなかった半年間、毎日「ゴルトベルク変奏曲」だけを集中的に弾き続けられたからです。それから毎年、バッハの命日である7月28日に近い日程でリサイタルを行い、バッハに思いをはせながら演奏しています。新たに経験したことが演奏に表れるため、毎年聴いてくださるお客様からは「年ごとに演奏が違う」と言われます。一年をかけて取り組む大きなチャレンジであり、日々のモチベーションにもなっている特別な曲です。

レクチャーでは、さまざまなピアノストやチェンバリストの演奏を聞き比べ、バッハらしい緻密な曲の組み立て方や巧妙な仕掛けを解説しました。有名なグレン・グールドの録音を聴いたことがある方は多かったようですが、

年代の違うグルルドや他の演奏家の録音を知っている方は少なかったようです。演奏家による解釈の違いやチェンバロならではの弾き方をご紹介しますことで、多彩な演奏家に興味を持っていただくきっかけも作れたのではないかと思います。



菊池洋子(きくちようこ) / KIKUCHI Yoko
群馬県前橋市生まれ。故田中希代子、故林秀光の各氏に師事。桐朋学園女子高等学校音楽科卒業後、イタリアのイモラ音楽院に留学。フランコ・スカラ、フォルテピアノをステファノ・フィウツィに師事。2002年、日本人として初めてモーツァルト国際コンクールで優勝。以降、ザルツブルク音楽祭に出演するなど、国内外で幅広く活躍し、人気・実力ともに日本を代表するピアニストの一人として高い評価を得ている。2022年からは毎年夏にJ.S.バッハの『ゴルトベルク変奏曲』の全曲演奏会を開催。現在はウィーン在住で、同地を拠点に活動している。2026年4月より高崎芸術劇場アドバイザーを務める。

Meet The

GUNMA SYMPHONY ORCHESTRA

G S O

Vol. **18**

80年脈々と引き継がれる群響サウンド
それを奏でる個性あふれるメンバーを紹介します

群馬交響楽団

首席ファゴット奏者

塩塚 俊樹

「自分の言葉で喋るのと楽器を吹くことがイコールになり得ると気付いたんです」。首席ファゴット奏者・塩塚俊樹さんは、ファゴットへの想いを語る。

小学生の頃、2歳上の姉に憧れて吹奏楽部に入部し、テナーサクスを始めた。中学校ではサクスの希望者が多く、ファゴットを担当。「楽器が変わるのが嫌で泣きながら帰った」と当時を振り返る。ただ、部員数60人超の中でたった2人のファゴットパートでは、自分のペースで練習できた。難解な楽器だからこそ、試行錯誤しながら学ぶことは楽しく、性に合っていた。

高校生になると、スマートフォン

を持ち、ファゴットの演奏動画を手軽に見られるようになった。プロによる、ファゴット本来の音を知ったとき、人の声に似ていると言われるその音に魅了された。ファゴットが、自分の意見を言うための、言葉以外の手段だと悟った瞬間だった。

恩師との出会いから音楽家の道へ

将来の夢は音楽教員。大学は鹿児島大学教育学部の音楽専修に進んだ。「オーケストラサークルでファゴットが主役になれる面白さを知った。オケでの演奏は『生きている、生かされている』実感があつた」。

大学一年次のとき、鹿児島で受講した講習会が、運命を変えた。新日本フィルハーモニー交響楽団の首席ファゴット奏者・坪井隆明氏との出会いだ。「演奏意図に腹落ちする感覚が衝撃的で、どうしてもこの先生に習いたいと思った」。

卒業後、坪井氏が講師を務める国立音楽大学アドヴァンスト・コースへ。レッスンを受けながら、オーケストラや吹奏楽、室内楽を学び、本格的にプロの道を志した。「先生は厳しく、半年間、同じフレーズしか聞いてもらえなかった。曲の解釈や相手に伝わる演奏方法を考えた」。楽譜を読み、考え、演奏する――2年間、恩師の元で研鑽に励んだ。

苦節を乗り越え、群響へ

卒業後はフリーランスの音楽家として活動。コロナ禍が到来し、不安定なバイト生活の日々を送った。コンクールやオーディションに挑戦するも、プロの舞台は遠かった。「でも、オケが好きだから諦めたくなかった」。初めて受けた群響オーディションは不合格となるものの、エキストラ出演のきっかけに。「互いの音を聞き合って、より良い音楽をつくる姿勢があるオケだと感じ、入りたいと思った」。2度目のオーディションで合格し、昨年11月に正式入団。ついに夢の舞台に立った。

群響の可能性を広げる挑戦を

入団後の印象は「お客様が温かく、帰り道に感想を話す姿を見て、地域にオケが根付いていると感じた」と話す。地元・鹿児島を思わせる自然豊かな景色が気に入る。最近はその駅巡りや散歩を楽しんでいる。今後については「やはり、喋るようにファゴットを吹くことが最終目標。伝えたいことを演奏で表現したい」と意気込む。「群響には新たな表現を試す人が多い。私も柔軟な考えで、オケの可能性を広げるための挑戦を続けたい」。静かだが力強い言葉で意欲を語った。

「喋るように吹きたい」

音で想いを伝えるために――」

塩塚 俊樹
SHIOTSUKA Toshiki

■出身 鹿児島県
■入団 2025年11月

■印象に残っている最近の演奏会

「第618回定期演奏会」(2026.05.16)
小林研一郎マエストロと目が合うと「応えたい」と力が湧く。演奏の渦に巻き込まれるような貴重な経験となった。

■好きな作曲家

チャイコフスキー
ラヴェル
ディーリアス

